

令和6年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

【めざす学校像】児童生徒一人ひとりの「自立と自己実現」に向けて教育実践するとともに、地域社会に対しても「多様性社会の実現」を推進できる学校 ＊その実現のために、《チーム光陽！つたえる・分かち合う・つながる》を合言葉に、以下の4点について連動させて取り組み、「好循環な学校」を作る。 1.【基礎】安全安心な校内体制構築の実現。 ～児童生徒の心身の健康と人権を守り、安全・安心に学べる学校～ 2.【実践】質の高い授業実践の実現。 ～主体的な学びを大切にし、児童生徒一人ひとりの教育的ニーズに応じた質の高い授業実践ができる学校～ 3.【組織】質の高い教員集団の実現。 ～学校組織として支援教育の専門性を高め、一人ひとりの教職員が学び続け、チームで協働できる学校～ 4.【発信】多様性社会の推進と実現。 ～地域に開かれ、お互いの学びを発信し、すべての人が自分らしく生きていく社会の実現に向けて使命が発揮できる学校～
--

2 中期的目標

1.【基礎】安全安心な校内体制構築の実現（安全安心力の向上）～児童生徒の心身の健康と人権を守り、安全・安心に学べる学校～ (1)「学校生活のあらゆる場面で児童生徒・教職員の人権が尊重される学校」を実践・実現するため、「人権尊重の教育」を推進する。 (2)児童生徒の「心身の健康」を守り、児童生徒・保護者・教職員にとって「安全安心な校内体制と医療的ケア実施体制」を構築する。 ・児童生徒の「心身の健康」を守るために組織として「報告・連絡・相談・連携」等の体制を維持する。(R5～R7の3年間 基礎基本の再構築) ・人工呼吸器の管理等、高度な医療的ケアも含めたすべての医療的ケアが、安全安心に行えるための環境整備を行い、校内体制を構築していく。 (3)学校における「危機管理体制」を強化し、事故・事案の未然防止に努める。また、万が一発生した時には、児童生徒・保護者・教職員へのリスクを最低限にとどめる。 ・危機管理関係の手引きを社会の変化に対応した形で「学校における危機管理の手引き」や「業務継続計画(BCP)」等を整理・集約し、実効性を追求して改善する。 ・「大災害発生時」においても児童生徒・教職員の「命を守る」対応ができるように、「学校防災アドバイザー」等を活用し、組織として準備する。 ・施設設備の点検、備品等の管理を徹底し、安心して学べる環境を整える。 2.【実践】質の高い授業実践の実現（授業実践力の向上）～主体的な学びを大切にし、児童生徒一人ひとりの教育的ニーズに応じた授業実践ができる学校～ (1)学習指導要領を踏まえた学校全体の「教育課程」について確認し、俯瞰的視点を持って「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」の目標を達成できるように実践する。 ・「光陽グランドデザイン」を全教職員で意識し、肢体不自由部門小・中・高・病弱部門でつながりをもった教育実践を推進する。 ・「第二次大阪府教育振興計画」「府立学校に対する指示事項」「学校経営計画」「光陽グランドデザイン」「シラバス」「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」をつなげて実践する。「個別的教育支援計画」(R5から新様式)を活用し、「全体から部分」「部分から全体」を常に考えて実践し、個のニーズを実現する。 (2)主体的な学びを大切にした授業実践(観点別評価含む)を実現するため「研究授業」や「授業振り返り研修会」「教職員間の授業参観週間・交流会」を充実する。 ・定期的に学年・学部で話し合い、授業力向上及び授業改善のための大切な観点を共有し、新たな気づきや学びを「明日からの授業」に活用する。 ・各教職員の「経験年数に応じた学び」や「教科等に応じた学び」を充実するために、学部を超えて相互に授業観察ができるシステムを構築・定着する。 (3)自立活動における専門性の向上を図るための取り組みを行う。 ・肢体不自由や病気のある児童生徒の実態や特性に応じた自立活動を行う。 ・GIGA スクール構想に伴う1人1台のタブレットやVRゴーグル・アバターロボット・視線入力装置等のICT機器を積極的に活用し、児童生徒の可能性を広げる。 ・スパイダー・移動式スパイダー・移動支援機器・スヌーズレン等を積極的に活用し、自立活動の指導の幅を広げ、充実させる。また、活用の好事例を蓄積する。 3.【組織】質の高い教員集団の実現（組織力の向上）～学校組織として支援教育の専門性を高め、一人ひとりの教職員が学び続け、チームで協働できる学校～ (1)全教職員のスキルアップ研修と次世代育成継承システム(OJT)を充実し、学校組織として支援教育の専門性を高める。 ・教職員の研修形態を「全校研修」と経験年数や課題別等の「ニーズ研修」の両輪で展開するため、「光陽研修ライブラリ」を充実し、組織として専門性向上を実現する。 ・全教職員が、「なぜ」「何のために」を大切にした、学年内での日常的な次世代育成継承システム(OJT)を充実させる。 (2)組織としての「引継システム」を促進する。 ・定期的な「整理整頓」の実行をおこない、校務のスリム化を促進する。 ・授業の「年間計画」「学習指導案」「教材教具」を整理して「光陽教材ライブラリ」を充実し、効率的に授業準備ができるよう活用する。 (3)教職員が「教職員としての根幹の業務」に専念できるように「教職員の働き方改革」を推進する。(校務の効率化・労働衛生安全体制の充実) ・教職員が心身ともに健康な状態で児童生徒に向き合い指導・支援するために、全ての教職員が自らの責任を果たし、「働きやすい職場環境作り」を促進する。 ・児童生徒・教職員にとって「安心安全な移乗支援」が実現するように、リフト等の導入を行い、多職種チームで検証を行いながら、組織としてリフト活用を推進する。 4.【発信】多様性社会の推進と実現（発信力の向上）～地域に開かれ、お互いの学びを発信し、多様性社会の実現に使命が発揮できる学校～ (1)「学校間交流」「居住地校交流」等について進化・深化させ、SDGsの視点も取り入れながら、「ともに学び、ともに育つ」教育のさらなる推進を行う。 ・「学校間交流」「居住地校交流」について、双方の学びを社会に発信することで、「すべての人が自分らしく生きていく社会の実現」に向けて使命を発揮する。 (2)「地域に開かれた学校作り」実現のため、保護者・地域住民・地域小中学校・関係機関との協働を推進し、併せて「支援教育のセンター的機能」を発揮する。 ・地域支援については、支援教育コーディネーターに加えて校内教職員の専門性を活用し、学校全体で「支援教育のセンター的機能」を発揮する。 ・光陽支援学校の実践を「光陽 GoGo フェスティバル」等で、保護者・地域幼稚園小中学校・地域住民・福祉や医療関係者等へ発信し、連携を充実する。 (3)児童生徒・教職員が光陽支援学校の取り組み・実践・自らの学びを積極的に発信し、「すべての人が自分らしく生きていく社会の実現」に向けて使命を発揮する。 ・教職員は、自分たちの実践について「わかりやすく伝える力」を強化し、「研修会」「実践協議会」等の機会を積極的に活用し、校内外へ発信する。 ・児童生徒が「ポッチャ大会」「ロボットプログラミング選手権」「絵画コンクール」「スピーチコンテスト」等の機会を活用し、積極的に挑戦できるよう組織として支援する。
--

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析[令和6年12月実施分]	学校運営協議会からの意見
【重点的に取り組み、肯定的評価が高まった項目】 ①人権 ＜保護者＞ 教員の人権に配慮した言葉や態度 肢体：R5:92.8％→ R6:97.2・9％、病：R5 66.6％→ R6:100％ ⇒各学期でのふりかえりの積み重ねの成果。呼称等 ②キャリア教育（自立と社会参加にむけた指導） ＜教員＞肢体不自由部門 R5:79.6％→ R6:85.6％ ＜保護者＞肢体：R5:71.4％→ R6:94・5％、病：R5 50％→ R6:60％ ⇒ 教員は、校内研修を実施(研修事後アンケート90％の肯定的評価)したり、学習指導案に明記したりして理解を深め、キャリア教育を意識することが増えている。保護者は、設問をわかりやすく変更したことも評価増の要因。 児童・生徒は、肯定的評価は35.5％、「わからない」が46.8％と最も多く、今後も学習内容や指導・支援の工夫が必要。	【第1回】 令和6年7月2日(火)実施 ○専門性の向上 ・PT、OT、STを活用することは大切だが、セラピストからの助言を教育的にうけとめて、実践するための教員の専門性を高める研修も必要である。 ○働き方改革 ・「光陽ふわり・ほっと」の取り組みがとてもよい。特別なことでなく、日常の中での「ふわり・ほっと」をそれぞれの先生方が、一日一つでもいいので探して見つけることが、メンタルヘルスにつながる ○発信 ・個人情報の問題はあるが、いろいろな形で児童・生徒の活躍ぶり、取り組みを発信していけるとよい。支援教育の魅力発信、教員の魅力発信にもなる。 ○学校教育自己診断 ・「学校教育自己診断」の評価指標は、肢体不自由と病弱の平均で出すのではなく、それぞれの障害種別に目標を決めた方がよいのではないか。

③安全対策 ○安全な医療的ケアの実施 ＜教員＞肢体不自由部門だけでなく、病弱部門でも肯定的評価が増加 肢体:R5:90.3%→ R6:95.1%、病:R5:43.8%→ R6:56.3% ⇒研修等での共有の効果、理解の深まり ○防犯・防災への備え ＜教員＞肢体:R5:91.3%→ R6:97.1%、病:R5:43.8%→ R6:62.5%、(保護者は維持) ⇒ 保護者への引継ぎ訓練を今年度初めて実施。教員だけでのシミュレーション等も綿密に行えた。病弱部では分教室のある病院との連携に着手したが具体化していない。<u>さらに進めていく。</u> ○定期的な整理・整頓 ＜教員＞＊教員のみの項目 肢体:R5:64.1%→ R6:78.6%、病:R5:50%→ R6:87.5% ⇒担当首席を中心に、各部、分掌で廃棄計画をたてて実行。<u>継続していく。</u> ○施設設備の日常的な点検・管理 ＜教員＞肢体:R5:55.3%→ R6:84.5%、病:R5 56.3%→ R6:81.3% ⇒毎月、安全点検を実施(R5 年度途中より) ④働き方改革、業務削減 ＜教員＞＊教員のみの項目 ○業務削減への工夫、改善 肢体:R5:58.2%→R6:66%、病:R5:62.6%→ R6:81.3% ⇒ 学校教育自己診断とは別に、ストレスチェックの集団分析では、業務量等に負担を感じている教員が少なからずおり、改善項目としてあがっている。<u>引き続き取り組む必要がある。</u> 【今後も大切にしたいよさ、強み】 ＊保護者からの肯定的評価が特に高まった項目 ○授業 肢体:R5:87.1%→ R6:95.9%、病:R5 50%→ R6:80% ○障がい理解: 肢体:R5:90%→ R6:95.9%、病:R5 66.6%→ R6:80% ⇒ 評価に甘んじず、障がい理解を含めた個々のニーズに応じた、よりよい授業づくりを追究していく。 ＊教員の肯定的評価が高い水準にあるもの ○人権尊重 R5:89%→R6:95% ○「学校の教育活動について教職員間で日常的に話し合っている」R5:93%→R6:97.5% ○「児童生徒への対応や仕事上の課題等について気軽に相談しあえるような職場の雰囲気がある R5:85%→R6: 89% 「児童生徒や保護者が、学級担任以外の教職員とも相談することができる」R5:83%→ R6:90.8% ⇒人権が尊重され、教員間でのコミュニケーションがとりやすく、児童生徒や保護者も相談しやすい、雰囲気の良い職場を維持する。 【課題となる項目】 ○業務削減への工夫、改善 改善傾向にはあるが依然として、肯定的評価 60%台である。一層の取組が必要。 ○地域に開かれた学校づくり 肯定的評価が減少傾向にある[R6:87.4%、R5:92%、R4:91%] 学校経営推進費での光陽 GOGO プロジェクトの取り組みが終了したことも関係していると考えられるが、GOGO フェスティバル自体の満足度変化なし。新たな取り組みよりも現状の取り組みを強化していく。	【第2回】 令和6年12月3日(火)実施 ○安心・安全 ・ヒヤリ・ハットを「ポジティブ・インシデント」、として、事故やけがを防ぐための大切なものとしてポジティブにとらえ、インシデンヒヤリ・ハットの段階で情報を回収し、それに対する対処をしていくことは、大事である。 ・「ふわりほっと」について、SNS などには、ネガティブなことが挙がることが多い。ポジティブなことについては、目が向けられにくい。しかし、「ふわりほっと」の取り組みは、あえてポジティブなことを共有しており、たいへん良いと思う。 ○発信 ・教員になりたいという学生が、少なくなってきた。「ふわりほっと」のようなもの、教員の仕事の魅力ややりがい等を学校内だけでなく、世の中に広げていってもらいたい。高校生や学生に読んでもらえると、「なりたい職業」の上位に「教員」がランクインするのではないかと思う。 ・病弱部の分教室の様子を動画で見ていると、子どもたちは、入院していると患者としての側面が強くなるが、映像を見る限り、分教室では小学生や中学生として学校生活を送っていると感じた。併せて、病弱教育、院内学級の役割の一端がとても伝わってくる映像だった。個人情報の取り扱いについては、難しいところもあるが、可能な範囲で映像や画像を見せていただきたいし、発信いただきたい。 ○働き方改革 ・ボッチャやプログラミングなど、先生方は多岐にわたり、様々な分野について勉強をしなければいけない。働き方改革と両立しなければならないので大変だと思う。子どもたちには学校にいる間に多様な経験を積んでもらいたい。そのために両立は難しいかもしれないが、先生方には、いろいろ身に着けていただきたい。 ・「Chat GPT」を有効に活用して、業務改善をすすめられ、将来にまた新しい展開を期待したい。 ○センター的機能 ・中学校の支援学級の90%が高等学校に進学し、支援学校へ進学するのは10%とここ20 年で逆転している。地域支援のセンター的機能として高等学校に関わっていただきたい。そのことは支援学校にプラスになってくることが多いと考える。 【第3回】 令和7年2月 12 日(水)実施 ○学校教育自己診断 【全体を通して】 ・学校全体で取り組まれている施策が具体的な数値で表れている点は大変評価する。学校全体の共通する課題や強みが明確になり、今後の学校運営方針において一貫性を持った評価や改善策が可能になることが期待される。 【アンケートの回収方法】 ・肯定的評価が、全体的に増加傾向にあることは評価できるが、保護者において未提出者が 4 割～5 割ある。特に病弱部門は、回答数の少なさ、「わからない」の回答の多さが課題。回収率の向上にむけての取組が必要。回収できなかった家庭の思いを何等かの形で回収できるようにすれば改善の手立てとなるのではないか。 ・保護者の中には、まだまだスマホや SNS を使わない、得意ではない人がいる。Webでのアンケートは、やらなくてもよいと考える保護者もいるのではないだろうか。そのことも念頭において、授業アンケートも含めて、アンケートの取り方は工夫がいるのではないか ○学校経営計画 R6 評価案、R7 計画案 【安全・安心】 ・防災の取組み、教職員の意識は高まったようだが、保護者にはささっていない。引継ぎ訓練時、保護者よりも放課後等デイサービスの迎えの方が多く、もったいなかった。 ・ヒヤリ・ハット、件数はもちろんだが、ヒヤリ・ハットを挙げやすい、共有されやすい雰囲気があることが大事だと思うので、その雰囲気を継続して学校の風土として根付いてほしい。いってほしい。そのことが安全・安心につながる。 【授業実践力、専門性の向上】 ・学校は、まず授業実践が第一、授業実践を大切にすることが学校全体のよりよい取組みにつながる。 ・根幹となる自立活動についての、基本的な理解を深め、実践力を引き続き高めるよう取り組まれることを期待している。 ・計画案にある特別支援教育総合研究所との研究協力を上手く活用されるといいだろう。指導助言をうけながら授業改善したり、新しい動きも知ったりできる。 ・個別の教育支援計画については作成が目的ではない。作り上げる中で、思いを共有したり、保護者と学校で役割分担をしたりできるような様式づくりにつとめてほしい。
--	--

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的 目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標 [R5年度値]	自己評価
1安全安心力の向上【安全安心な校内体制構築の実現】	(1) 人権尊重の教育推進	(1) ・児童生徒に使用する「ことば・行動」と同僚間で使用する「ことば・行動」の質を高める。 ・教職員のいじめ等への認識を高め、予防(仲間づくり等)に係る実践をさらに進める。	(1) ・全校研修1回で外部講師招聘。 ・毎月の学年会等を活用して、「ことば・行動」について振り返り、課題ケースは即時対応。 ・学期ごとに好事例等をまとめて実践に活かす。 ＜学校教育自己診断の関連項目で教員の肯定評価、人権:90%以上、いじめ:75%以上 〔人権:肢 89.3%、病 87.6%、いじめ:肢 75.7% 、病 68.8%〕＞	(1) ・「こどもの人権」をテーマに、えんばわめんと堺様より講師を招聘し、全校研修会実施。実施後のアンケートにおいて、教員の肯定評価 90%以上を得た。(○) ・児童生徒および同僚間で使用する「ことば・行動」について、学年会で振り返り、気になることがあがってきた際には、学部を超えて共有し、改善するよう取り組んだ。各学期末には、気になることだけでなく、良くなってきたこと、今後取り組みたいことも出し合い、人権意識を高め、次の実践に活かすことができた。(○) ＜人権:肢:97.2%、病:100%いじめ:肢:81.5%、病:82.5%＞(○)
	(2) 心身の健康を守る教育の推進	(2) ・児童生徒のいつもと違う姿は、報告・連絡・相談の徹底。インシデント・アクシデント生起時は、「正確な事実確認」と「原因分析」「具体的な改善策」をチームで迅速に対応。 ・安全安心な医療的ケア実施のため、教育的意義や基礎知識の向上にむけた研修の実施、教員と看護師の協働実践をまとめた校内研修会(事例発表)の実施する ・改訂した人工呼吸器使用児童生徒の対応マニュアルにもとづき実践を重ね検証行い、専門性を高め学校全体により良い医ケア体制を構築する。	(2) ・インシデント・アクシデント生起後、必要に応じて症例検討。確認事項は、朝礼等で全体共有。(継続) ・研修会の実施年2回(基礎研修1回、事例研修1回) ・教員と看護師の協働実践1事例を教職員研修として実施。(現状維持) ・医療的ケア安全委員会での検証、検討年3回。 ＜学校教育自己診断の教職員の関連項目 肯定的評価 70%以上〔肢:90.3%、病:37.5%〕＞	(2) ・インシデント・アクシデントを未然に防ぐためのヒヤリ・ハット報告の運用方法を今年度変更し、昨年度よりもヒヤリ・ハットの報告件数が大幅に増加した。10 件以上／月〔年間数件〕内容は必要に応じて学部や全体で共有している。(◎) ・基礎研修を、「肢体不自由児の近年の傾向と体調が不安定になる主な要因」の内容で外部講師(医師)を招聘し、校内研修会を 1 回実施。事例研修を 3 学期末、教員と看護師の協働実践研修会を実施予定。(○) ・人工呼吸器使用児童生徒の対応マニュアルについて、今年度使用した当該学年と検証(3 回)。次年度、新入学生の医療的ケア体制変更に伴い、対応マニュアルの改訂を検討中。 ＜89.9%、肢体:95.1%、病:56.3%＞(○)
	(3) 危機管理体制の強化	(3) ・大阪市指定避難所としての運営を含め、授業時、休日、夜間等場面に応じた防災対応マニュアルの検討、作成を行う。 ・大災害に備え、旭区や地域自治会、分教室では病院と協力したりして、組織として準備する。 ・教職員が安全な環境づくりの意義について再認識できる取り組みを行う。校内の安全点検を充実させ、危険箇所や備品の故障等への迅速な対応を行う。	(3) ・「大災害発生」を想定した模擬訓練(関係機関含)実施1回。 ・保護者への児童生徒の引継ぎ訓練を実施、1回。 ・地域関係者との連携会議年3回、病棟関係者との連携会議2回 ＜学校教育自己診断の教員の関連項目で肯定的評価 70%以上〔67.5%〕＞ ・毎月安全点検の実施 ・不要物品・備品等の把握と廃棄計画の作成。 ＜学校教育自己診断の教員の関連項目で肯定的評価 60%以上〔肢 55.3%、病:56.3%〕＞	(3) ・全校生徒対象に「大災害発生」を想定した児童生徒引き渡し訓練を 1 回実施。大災害時の引きつぎ方法等を実際に確認することができた。(○) ・地域関係者との連携会議 2 回、病棟関係者との連携会議 2 回。旭区役所防災安全課担当者と新森第 7 町会副会長と災害時を想定した連携会議を行い、校内に備蓄している地域用の災害物品を確認することができた。地域と会議は目標回数には達しなかったが、必要なことは確認できた。(○) ・各分教室の病棟連絡会で、大災害時の避難方法について確認した。総合医療センター分教室では病棟との引き継ぎについてのマニュアル作成を進めつつある。(○) ＜94.1%＞(◎) ・安全点検では、危険箇所の報告や備品故障の修理依頼の提出を、全体で積極的に促し、修理・改善できるところから順次進めている。(◎) ・各部署が管理する不要物品を廃棄できるように計画し、教科・学部・分掌それぞれの部署での不要物品を廃棄・必要なものを整理することができた。(○) ＜79. 8 % 肢:78.6%、病:87.5%＞(◎)
2授業実践力の向上【質の高い授業実践の実現】	(1) 個のニーズの実現	(1) ・「光陽グランドデザイン」をあらゆる場面で意識した教育を実践する。 ・キャリアプランニングマトリクスの完成とそれを意識した教育実践の推進。 ・「個別の教育支援計画」(R5から新様式)活用し、キャリアプランニングマトリクスを意識した個別の教育支援計画の長期目標を策定するなど、個のニーズを実現にむけた取り組みを行う。	(1) ・研究授業時の学習指導案や授業略案などに「光陽グランドデザイン」やキャリアプランニングマトリクスとの関連付けを明記し実践できたか。 ＜個別の教育支援計画、個別の指導計画の活用について、学校教育自己診断の教員の関連項目で肯定的評価 90%以上〔肢:85.4%、病:93.8%〕＞	(1) ・校内で実施した研究授業の指導案に、キャリアプランニングマトリクスの観点を明記し、「光陽グランドデザイン」やキャリア教育を意識した授業づくりに取り組んだ。(○) ＜88.2% 肢:87.4%、病:93.8%＞数値としては目標に達していないがほぼ達成(○)
	(2) 質の高い授業実践	(2) ・「授業振り返り研修会」「教職員の授業参観週間」を充実させる。授業参観シートを改善し活用することで意見交換を活発化し、学びを「明日からの授業」に活用する。 ・授業「光陽いいとこ集め」を引き続き蓄積する。 ・10 年経験者研修等を活用した「公開研究授業」を実施し、ミドルリーダーとしての授業改善を進める。 ・質の高い授業作りのため、全校研修会で学び、授業改善につなげる。 ・病弱教育における教科指導力をさらに高め、教科書改訂等に伴う必要書籍や研究書籍等を確保し研究を進める。 ・肢体不自由教育部門と病弱教育部門の教員が相互に学びあう機会を広げる。	(2) ・「授業振り返り研修会」1回、授業参観週間1回の実施。(肢体不自由教育部門と病弱教教育部門教員の実践交流含む) ・授業参観シートを観点別等に改善 ・「光陽いいとこ集め」を継続し、首席や指導教諭から各学部会等にて共有。 ・「公開研究授業」3回以上実施(現状維持) ・研修・研究に必要な書籍やアプリケーション等を選定し充実をはかる。 ＜学校教育自己診断の教員の関連項目で肯定的評価 90%以上〔肢:85.4%、病:93.8%〕＞	(2) ・学部ごとに「授業振り返り研修会」を1回以上実施し、「授業参観週間」を1回実施した。授業者も参観者も有効活用できるよう授業参観シートを観点別に改良し、活用した。(○) ・全校研修会において、本校のキャリアプランニングマトリクスについての理解を深め、授業改善につなげるために、肢体不自由部門の各学部と病弱部門の授業実践を報告しあった。(○) ・2・3学期の各学部会で「光陽いいとこ集め」を発表し、キャリア教育の観点を踏まえた授業実践を教員間で共有することができた。(○) ・公開研究授業を3回実施(○) ・校長マネジメント経費や私募債を活用することで必要な指導書等の書籍を一定数確保することができた。(○) ＜91.6% 肢:92.2%、病:87.5%＞(○)

	(3) 自立活動の充実	(3) ・肢体不自由や病気のある児童生徒の実態や特性に応じた自立活動を行うため、自立活動に対する基礎知識を底上げするための手立てを検討する ・実態把握、目標設定や評価の方法についての研修や、福祉医療人材によるPT、OT,STからの助言を共有する方法を検討し、活用を充実させる。 ・個別の指導計画の目標に基づき、移動式スパイダーや移動支援機器・スヌーズレン・アバターロボット、メタバース等の機器を積極的に活用し、評価を行う。	(3) ・校内研修年2回以上、1回は外部講師による研修を行う。 ・学校教育自己診断に項目を設け、肯定的評価、教員、保護者ともに70%以上 ＊R5までは、学校経営推進費「光陽GOGOプロジェクト」としての評価	(3) ・授業づくり、キャリア教育に関して各1回、自立活動に関して1回実施。病弱部主催の全校研修会を1回実施。分教室のある総合医療センターの医師を招聘し、病気（摂食障害）の理解を深め、学校教育に求められることを学ぶ機会となった。（○） ・笑顔モデル校として、アバターロボットやメタバースを活用した実践を行った。（◎） ・移動式スパイダーや移動支援機器などの使用時間を各部門で調整し、計画的に自立活動の指導に活用している。（○） ＜教員：89.9%、保護者：94.8%＞（○）
3 組織力の向上 【質の高い教職員集団の実現】	(1) 教職員の専門性向上	(1) ・「光陽研修ライブラリ」システムのサイト運用と活用に向けた準備を進める。各分掌等で活用方法を検討する。 ・全教職員が「なぜ」「何のために」を意識した学年・学部内での日常的な次世代育成継承システム(OJT)を充実させる。（学年会や学部研修会の充実と活用）（継続）	(1) ・ライブラリの保管、整理ルールを作成。 ・各分掌での活用年1回以上、新たなコンテンツのアップロード年1つ以上 ・経営会議で実施状況の把握、学期に1回。研修後のアンケート等でニーズや改善ポイントを探る。	(1) ・「光陽研修ライブラリ」の充実化のために研究部で、分掌業務として管理するルールを整理した。研修を企画した各分掌等からデータを集約し、計5つの動画や資料をサイトへアップした。各分掌等で主催した研修を随時サイトへアップできた。（○） ・研修後にはアンケートを実施し、次年度への検討材料としている。（○）
	(2) 引継システムの推進	(2) ・学校ICTシステムの更新にあわせて、共有フォルダを整理し、校内でルールを定め同じ整理方法で整理できるようにする。 ・「光陽教材ライブラリ」のさらなる充実とシラバスとの関連付けた活用を促進し、効率的に授業準備ができるよう活用する。	(2) ・学校教育自己診断の教員の関連項目、肯定的評価、60%以上[57.5%] ・学校教育自己診断に活用に関しての項目を設け、教員の肯定的評価、60%以上	(2) ・ICT教育部を中心に、計画的に学校ICTシステムの更新作業を進めた。 ＜89.1%＞（◎） ・アップロード作業に伴うルールを改善し、研究部が中心となって毎月アップデート期間を設定し、周知、確実なデータの蓄積と活用の促進を図った。＜68.1%＞（○）目標値には達しているが、さらに進めていく。
	(3) 教職員働き方改革推進	(3) ・校務のスリム化、効率化について、運営委員会B等で検討する。 ・以下の3点を意識して教職員が心身ともに健康な状態（Well-being）で、「働きやすい職場環境作り」を行う。 ①「仕事の時間を区切る」（毎週水曜日全教職員定時退勤） ②「仕事のスリム化を行う」（ICTを活用した校務の効率化） ③「仕事の仕方を変える」（発想の転換・業務連携） ・「光陽ふわり・ほっと」を活用して、教職員同士が互いに認め合いそれを共有することで、気持ちよく働きやすい環境づくりを行う ・移乗リフト等について、多職種チームで検証を行いながら、組織としてリフト活用を推進する。	(3) ・各学部、年間を通し1項目以上業務内容を簡素化・削減できそうな項目を挙げ計画をたてられたか。 ＜学校教育自己診断の教員の関連項目、肯定的評価、60%以上[57.5%]＞ ・「ふわりほっと」事例、年間40以上 ・担当首席と安全衛生委員会を推進メンバーとして、継続してリフト活用の成果を「児童生徒」と「教職員」の両面から整理をし、活用の集約を行う。	(3) ・運営委員会Bのレジメに、各部署の進捗状況を記入できる欄を設け、毎月共有した。すべての部署で1項目以上、2月までで20項目の業務内容の簡素化ができた。（○） ・教員から業務のスリム化についてのアイデアを募集し、バスの乗車変更連絡をICTを活用して業務をスリム化させることができた。他のアイデアについては、職員で共有し実施に向けて検討、準備中。 ＜67.2%＞（○） ・収集した事例を週に1回、職員朝礼で共有。1月までで32の事例を共有した。（○） ・7月に腰痛予防講座を実施し、しまだ病院やリフト業者と連携しながら腰痛予防に努めた。始業体操も継続して実施している。1月に腰痛予防講座を全体研修として実施した。（○） ・学部研修会でリフトの使用方法を周知し積極的に活用を進め、定着しつつある。（○）
4 発信力の向上 【多様性社会の推進と実現】	(1) 交流および共同学習の充実	(1) ・「学校間交流」「居住地校交流」のさらなる充実。「出前授業」を行い、交流後の「相互の学びや気づき」を学校間で互いに発表、共有しあう。 ・「届けよう服のチカラプロジェクト」4年目の取り組み実施。交流校や地域と協働して取り組む。	(1) ・「対面交流」「オンライン交流」を併用して、学びを深める。 ＜学校教育自己診断の関連項目、肯定的評価保護者肢：90%以上（維持）病：67%以上、教員肢：90%以上（維持）病：70%以上〔保護者肢：95.7%、病：66.7%、教員肢：94.2%、病：62.6%〕＞ ・相手校（教員、児童生徒）にアンケートを実施し学びや気づきについての肯定的評価70%以上。 ・「届けよう服のチカラプロジェクト」協働校等、4校。	(1) ・学校間交流においては、小学部2校、中学部1校、高等部1校と実施。居住地校交流においては、小学部22名、中学部9名が希望して交流を実施した。（○） ・本校の児童生徒や支援教育の理解を推進するため、事前学習として出前授業を積極的に行っている（小学部：18件、中学部：5件実施） ・相手校のアンケート結果は集約中だが、「互いに関わりあいながら楽しめた」「協力しあってくれた」等の振り返りがあった。 ・病弱部においてはオンラインを活用して、原籍校と交流を深めたり、行事に参加したりして復学支援を進めた。（○） ＜保護者肢：91.7%、病：30%、教員肢：94.2%、病：86.6%＞（○） ・「届けよう服のチカラプロジェクト」に参加し、授業内でSDGSをテーマに大きなモニュメントを作成し、協働校4校で976枚の服を集めることができた。（○）
	(2) 地域に開かれた学校作りセンター的機能の発揮	(2) ・「授業実践・教職員研修」について積極的に地域へ公開（オンデマンド研修等）するとともに、コーディネーターによる地域支援も含めたセンター的機能を発揮する。 ・近肢研、大肢研（自活研）、大阪府造形研の幹事校として、研究大会や展覧会の円滑な運営を行うため校内外で組織的に取り組む	(2) ・「公開研修」を3本以上実施。 ・「光陽GoGoフェスティバル」の開催 ＜学校教育自己診断の関連項目、肯定的評価教職員肯定的評価肢：85%以上（維持）、病60%以上、保護者肢：75%以上（維持）病：55%以上〔教職員肢：85.4、病：56.3%、保護者肢：78.6病50%〕＞ ・各研究会等の事後アンケートで、運営に関する項目の肯定的評価70%以上	(2) ・公開研修を3本実施できた。夏季公開講座として、「地域支援の実践発表」「摂食障害の理解」について、冬季公開講座として、「ICTの活用」をテーマに実施し、地域のセンター的機能発揮に向けて取り取り組んだ。・受講者アンケート肯定的評価100%（○） ・12月26日に地域の小中学校・事業所・卒業生・在校生を対象に本校の取り組みを体験できる「第3回光陽GoGoフェスティバル」を開催し、153名の参加者に本校の特色ある取り組みを体験していただけた。参加者のアンケートでは、満足度100%の回答を得ることができた。（◎） ＜教職員83.2%、保護者80.5%＞○ ・校内でプロジェクトチームを立ち上げ、幹事校として他校や会場と連携し円滑な運営を行った。運営に関する肯定的評価、近肢研：97%、大肢研：95%、造形研（子どもたちの賛歌展）92%◎）

	(3) 実践や教育活動の積極 的発信	(3) ・保護者、特に病弱教育部門の保護者に対して、ブログ等も 活用して学校の取り組みを積極的に伝える。 ・教職員は、自分たちの実践について「わかりやすく伝える 力」を引き続き高め、「研修会」「実践協議会」等の機会を 積極的に活用し、校内外へ発信する。 ・児童生徒が「ボッチャ大会」「ロボットプログラミング選手権」 「絵画コンクール」「スピーチコンテスト」等の機会を活用し、 積極的に挑戦できるよう組織として支援する。	(3) ・学校教育自己診断の保護者の関連項目、肯定的 評価、肢：80％以上[78.5％] 病：55％以上[50％] ・研究会等校内外で実践発信。学校(個人・グルー プ)から3実践は、校外へ発表。(維持) ・大会等への出場、年間で5以上〔5回／年〕(維持)	(3) ・肢：81.9％(○)、病：40％。(△)、病弱部保 護者の回答数5と極少のため指標となりにく いが、引き続き課題ではある。 ・大阪府や市教育委員会が主催する教員対 象研修等で、特別支援教育(主に肢体不自 由)や本校の実践について発表した。実践事 例、5事例発表。(○) ・ボッチャ大会では年間で6回出場し、その様 子をHPに掲載することで外部へ発信するこ とができた。(○) ・全国院内学級絵画展において、金賞・銀 賞・銅賞を受賞した。(○) ・ロボットプログラミング選手権に、病弱部小 学部、中学部の2チームが参加した。(○)
--	--------------------------	---	--	---